

琉球大学学術リポジトリ

琉球大学千原キャンパスにおける森と人々の暮らしに関するフィールド調査

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2008-02-14 キーワード (Ja): 琉球大学キャンパス, 森と暮らし キーワード (En): Campus of the University of the Ryukyus, livelihood of people and the forest 作成者: 仲間, 勇栄, 仲地, 宗俊, 菊地, 香, Nakama, Yuei, Nakachi, Soushun, Kikuchi, Koh メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/3621

琉球大学千原キャンパスにおける森と 人々の暮らしに関するフィールド調査

仲間 勇栄*・仲地 宗俊*・菊地 香*

Yuei NAKAMA, Soushun NAKACHI and Koh KIKUCHI : Field
Survey on the livelihood of people and the forest on the
Senbaru Campus of the University of the Ryukyus

キーワード：琉球大学キャンパス、森と暮らし

Key words : Campus of the University of the Ryukyus, livelihood of people and
the forest

Summary

The University of the Ryukyus, lead by the Faculty of Agriculture, relocated from its Shuri Campus to its new Senbaru Campus in March of 1979. Twenty-three years have past since the university relocated to its present location. The Senbaru Campus (104ha) straddles the three administration districts of Ginowan City, Nakagusku Village and Nishihara Town. Prior to the relocation the area was mainly the community forest of Nishihara Town.

The history of the community forest of Nishihara Town and its relationship with the local people are largely unknown. By knowing the history of the campus forest and in turn passing that knowledge on to the students will have a great educational effect and help to increase the environmental awareness of the students.

Based on historical documents and person-to-person interviews from the viewpoint of the livelihood of the people, the following will try to trace the history of the Senbaru Campus forest using the Tanabaru settlement (located on the south side of the Senbaru Campus) as an example.

The present Senbaru Campus of the University of the Ryukyus was known as the Tanabaru Mountain Forest / Tanabaru Mountain District in the modern era of the Ryukyu Dynasty. The timbers exclusively used for the royal capital, Shuri, were purveyed from the wooded mountain. There was also a tea plantation within the campus area that was under direct control of the monarchy. The plantation produced Japanese and Chinese Teas and served them to the nation (royal families and privileged classes). Together with the tea bushes, *Cunninghamia lanceolata*, used for ships masts, and *Podocarpus macrophyllus*, an oak used for construction were also grown.

Most of the wooded mountain area changed its ownership appellation to the community forest of Nishihara Village at the time following the land consolidation and national land

* 琉球大学農学部生物生産学科

grant from the 32 to 39 of Meiji (1899-1906) and the subsequent process of establishing towns and villages.

Even after the transfer of ownership to Nishihara Village, the community forest was managed under the forest ranger system of the Ryukyu Dynasty. The main work of a forest ranger was to prevent the cutting down of trees without permission.

Of the trees that grew in the community forest, a large majority were *Pinus luchuensis* (Ryukyu Pine tree).

As was the common practice in the Ryukyu Dynasty, the people of the area freely entered the community forest to collect fallen wood (for firewood) other than forbidden trees, fruit and berries, and to cut grass to feed cattle, horses and goats.

According to the person-to-person interviews that were conducted in the southern area of the campus, Tanahara settlement, the plants of the forest were used for food, medicine, timber, green manure, livestock feed, dyeing, divine rites, and recreation etc.

The wilderness around the community forest was used in the various villages as Kayamoh. The *Imperata cylindrical* taken from the Kayamoh was used as thatch on the roofs in the villages.

Within Senbaru Campus, remnants (wells, graveyards etc.) of the people who took up temporary domicile in the forest, including the rangers can be seen. Close to the Faculty of Agriculture there is sacred place called Shijimata Utaki that people of Tanabaru settlement still visit twice a year to pray.

In the process of transferring the Ryukyu Dynasty wooded mountain to the Nishihara Town public forest, various local people in the forest, the present Senbaru Campus, carved their livelihoods out. The campus with the vivid history of these people's mountain should be recognized once more and we must assume responsibility to reflect this awareness on future campus life for those learning at the highest academic institute in Okinawa.

はじめに

琉球大学は1979年3月に、農学部を最初に、首里キャンパスから千原キャンパスに移転してきた。現在の敷地に移ってからおよそ23年が経過している。千原キャンパスの敷地は、宜野湾市、中城村、西原町の三つの行政区にまたがり、移転前は主に西原町の町有林であった。この町有林は琉球王朝時代には棚原山林、棚原山地と呼ばれ、王府の御用木を生産する杣山であった。戦前戦後には、この地は周辺の人々からチャーヤマ（茶山）とかタナバルヤマ（棚原山）と呼ばれている。

この町有林がどのような歴史をもち、地域の住民とどう関わってきたのか、という点については、よく知られていない。

大学の共通教育では、環境問題、自然保護、森の文化史などのテーマで、講義が行われている。それらのシラバスによると、日本や世界に関する普遍化した話題が多くみられる。しかし、自己の立つ所的事实を再認識し、それを他所と相対化して初めて、問題の本質的意味が理解されてくるように思う。

歴史的に創れた森を破壊して琉球大学のキャンパスができ、そこで高尚な環境問題が論じられている現状をみたとき、その矛盾点を自らの負の遺産として、学生に伝えていくなれば、その教育的効果は実に大きいものである。

千原キャンパスの自然については、トピックスとして大学学報などで記述されている事例はあるが、森と人々の暮らしの視点から、歴史的に取り上げた例はほとんどない。

以下、現在の千原キャンパスの森の歴史について、歴史資料や聞き取り調査を踏まえて、とくに棚原集落（千原キャンパスの南側に位置）を事例に、人々の暮らしの視点から取り上げてみようと思う。

I 琉球王朝時代の棚原山林

1. 杣山制度の再編

近世期の琉球における林野制度の大きな特徴は、日本本土と異なり、律令制国家時代の古い杣山制度が生き続けていた点である。

この杣山制度は1700年代の20年から50年のおよそ30年の間に、古琉球的林野利用（模合利用）から近世的林野利用（1村所持利用）の形へと再編されていった。

この再編過程で各間切や村の境界測量が実施され、杣山と山野や、各間切・村ごとの杣山の管理区域が確定した。この土地制度改革を一般に「元文検地」と呼んでいる。

18世紀の20年代から50年代には、幕藩体制下における行財政の行き詰まりや石高・山年貢と実質的な生産量との乖離から、土地制度や林野改革などが日本全国規模で実施されている。この全国の流れに沿って、琉球の林政改革も実行されていった。

『球陽』の巻十三の項目に「二十三年、法司蔡温に命じて、始めて官僚に山林の法を教えしむ。」の見出しで、次のような事が書いてある（『西原町史』第二巻資料編一、以下の文章は仲間訳）。

「我が国には、山林の法をよく知る者がいない。中頭地域の棚原山林はすでに絶えて樹木はない。北谷、読谷山、越来、美里、具志川の五地域の山林もほとんど絶えてない。恩納、金武、名護、本部、今歸仁の五地域の山林は、やや衰えて、美材は將に絶えようとしている。ただ、羽地、大宜味、久志、国頭の四地域に、少し美材はあるのみ。十数年経てば国用の材は欠乏するだろう。蔡法司（蔡温）は国王の命を受けて、官僚を引率し、各地域の山林を巡見して、その取り扱い方法を指導した。それ以来、琉球国人は始めて山林の法があることを知った。」

尚敬王二十三年は1735年にあたる。蔡温らが調査した時点で、西原間切の棚原山林には樹木は絶えてほとんどない状況を、この条文は伝えている。

琉球では、まず最初に、各集落や間切ごとに山の「方切」（検地）を行って、杣山と山野を大別し、さらに各間切や村が管理すべき山の境界を区分けしていった。そのねらいは、これまで模合利用（共同利用）されていたやり方では、山の管理が杜撰になるため、管理主体を明確化して、その責任体制を強化することにあった。

各間切の検地を進めながら、王府は杣山や山野の管理・利用に関する法令等を布達し、杣山奉行体制の下で、全琉球の林野行政を掌握する。中頭地方の杣山は王府内の山奉行所が管轄し、地方レベルでは、地頭代以下の総山当や山当などの山役人が管理指導していた。

中頭地方の杣山の管理主体は主に間切である。他の地域では村が管理主体になっている場合が多い。

18世紀の中ごろまでに完了した元文検地の結果によれば、琉球国内の杣山の総面積は95,196町歩で、うち国頭は44,525町、中頭は3,074町、島尻は2,027町、宮古は3,373町、八重山は42,197町となっている（仲吉朝助『杣山制度論』明治37年）。

仲吉朝助の『杣山制度論』では、西原間切の杣山面積は51.6町、中城間切のそれは47.2町と記されている。近世期に作製された「薩摩藩調製図」をみると、西原間切と中城間切の杣山は、沖縄本島の南端に孤立して位置している。西原間切の杣山は「棚原山林」と呼ばれ、その場所は現在の琉球大学千原キャンパスの敷地（104ha）と重なっている（図1参照）。

近世琉球の山林面積の約70%は杣山である。杣山は王府の御用木の生産地で、山奉行体制の下で、各間切の地頭代以下の山役人（総山当、山当、杣山筆者など）が直接監督指導する山である。その管理利用は、間切や村の共同体によって、夫役などの形で行われていた。

2. 棚原山地の茶園

琉球王府の公文書を集めた『球陽』の尚敬王二十一年(1733)の条に、「始めて茶園を棚原山地に闢く」の見出しで、茶栽培の経緯が、以下のように記述されている。

その原文を解説的に述べると、こうである。

「琉球には、以前から茶樹はあったが、その製茶の方法は、よく知られていなかった。ただ粗茶を出すだけだった。首里の向秀実(知名筑登之親雲上朝宜)が、1731年に進貢使に同伴して、中国の福州に入り、茶葉を製造する方法を習い、製茶の器物も一緒に持ち帰ってきた。試みに清明、武夷、松羅などの種類の茶葉を製造してみると、香りがとても良く、味も甘めで、中国のお茶とあまり変わりがなかった。この年(1733)になって、茶樹を棚原の地に栽植し、国用に供することにした。棚原山地内の二万八百五十余歩を開いて、茶種、杉、檜などを植え、茶樹が新芽を出したときには、和漢の茶葉を製造して、国用に供する。」

この『球陽』の記述から、1733年に棚原山地に王府御用達の茶園を開いたこと、これを契機にいろいろな種類の茶葉を製造するようになったこと、棚原山地に開いた茶園面積が20,850余歩であったこと、茶種と一緒に杉、檜などの木も植えられていたこと、などの事実が確認できる。

茶種と一緒に植えられている杉は、日本でいう杉のことではなく、南中国原産の広葉杉(和名ではコウヨウザンと呼ぶ)のことで、別名リュウキュウスギともいい、琉球王朝時代に中国から導入されたものである。その後、日本へも琉球経由で伝わっている。この広葉杉は琉球では、主に船の帆柱用材として利用されていた。日本産のスギは、琉球では枚の字を当てて書く。

檜はイヌマキのことである。この木は琉球では、建築用材としては一級品で、広葉杉などとともに、琉球王国の御用木として植栽され、間切や村レベルで厳重に管理されていた。

聞き取り調査によると、棚原山の茶園跡は、今の琉球大学構内の体育館の辺りで、そこは昔からチャヤマ(茶山)と呼ばれていたという。

この茶園跡の周辺には、千原という小集落があって、この茶園を特別に管理する家もあった、といわれている。

もともと千原の集落は、寄留民が集まってできたもので、1932年(昭7)に森川集落から分かれている。その森川集落は、1931年(昭6)に、棚原集落から分離している。

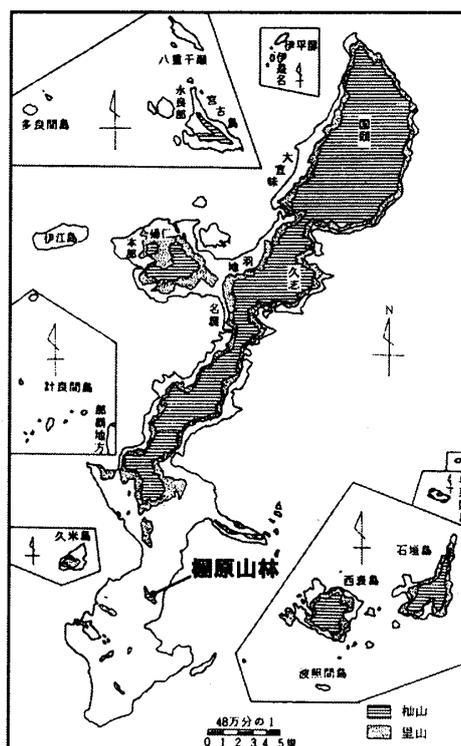


図1 琉球王国時代の茶山と里山の分布

注1. 仲間勇策『沖縄林野制度利用史研究』141頁より転載。

注2. 棚原山林は王朝時代の茶山で、現在の琉球大学千原キャンパスと重なっている。

II 明治期の林野官民有区分と公有林の成立

1. 沖縄県の林野官民有区分の特徴

明治期の沖縄県の林野所有は、土地整理法と茶山処分二つの変革プロセスを辿って形成されている。

その第一は、明治32年から36年にかけて実施された土地整理、いわゆる土地の官民有区分(地租改正)である。

1899年（明治32）「沖縄県土地整理法」の公布により、杣山は一方的に官有地に指定される。すなわち、土地整理法18条で、杣山は次のように規定されている。

「杣山、川床、堤防敷、道路敷及びその余地、その他の民有と認めるべき事実のないものは総て官有とする。杣山の保護管理に関しては、勅令をもって規定するものの外は、従来の慣行による。」（仲間が現代文に書き換えた）

沖縄県における土地整理法にもとづく林野の官民有区分のやり方は、明治初期の他府県における官民有区分の方法とは違っている。たとえば、他府県の場合には、1876年（明治9）1月の地租改正事務局別報第11号達「山林原野等官民有区別処分派出官員心得書」で官民有区分の基準が示され、その基準に従って林野の官民有区分事業は進められていった。この心得書によれば、人工造林や秣場のための草焼きなどが、主に民有地たるべき要件（基準）として示されている。つまり、農民は彼らの支配・進退する入会地について、これらの要件の立証責任が問われていたのである。

ところが沖縄県の場合には、他府県のような入会地に関する基準は事前に公示されず、土地整理法でいきなり、とくに杣山などは、官有地に囲い込まれている。

この官民有区分によって、林野面積137,297haのうち72%は官有に、12%は公有に、16%は私有に、それぞれ編成替えされている。琉球王府時代の杣山はそのまま官有になり、山野の一部が官有地に移動している。

2. 杣山処分と公有林の創設

土地整理法の公布で「民有の事実なき林野」は暫定的に官有地に編入され、その後、「沖縄県杣山特別処分規則」（明治39年7月公布）と「沖縄県国有林野整理処分規則」（同年同月公布）によって、杣山は民有として払い下げられていった。

「沖縄県杣山特別処分規則」の第一条では、杣山は国有林として扱われ、国土保安上又は経営上、国有として保存する必要のないものは、随意契約で売り払うことができる、と規定されている。つまりこの段階では杣山＝国有林野は、すでに要存置及び不要存置林野に分けられ、不要存置林野の処分の形で処理されているのである。

整理処分調査規程にもとづく実地調査結果によれば、当時の国有林野総面積100,289町歩のうち、存置見込みのものは33,429町歩（33%）、不要存置見込みのものは66,847町歩（67%）、不要存置売り払い見込み価格は111,474円（1.7円／町）となっている。

大正4年の林野の所有形態をみると、林野面積134,210町歩のうち、28%（37,828町歩）は国有林、45%（60,051町歩）は公有林、27%（36,331町歩）は私有林となっている。

このように沖縄の林野所有は、明治32年の土地整理と、明治39年の杣山特別処分の二段階を経て形成され、この過程で公有林（今日の市町村有林）も創設されてきたのである（仲間勇栄『沖縄林野利用史研究』ひるぎ社、1984）。

III 戦前期における棚原山の管理利用

1. ヤマバーン（山番）による管理

聞き取り調査によると、明治30年代ごろ、泉川さんと石原さんという人が、棚原山林内のヤマバーンに指名されたという。泉川さんの家は、今の琉球大学北食堂あたりに、また、石原さんの家は農学部棟の南端の方であった。

ヤマバーンの区域はそれぞれ決まっていた。山を管理する手数料として、クワーシチが与えられていた。クワーシチとは農耕用の土地のことである。クワーシチの面積は600坪くらいで、畑の税金はなく、土地の所有権は西原村（当時）、耕作者はヤマバーンとなっていた。

ヤマバーンの主な仕事は、自分の管轄区域の村有林の盗伐の取り締まりであった。取り締まりが厳しく、松の枯れ枝さえ採れなかった。

ヤマバーンは自家用の薪や木材などは、管轄区域の村有林内から採っていた。ヤマバーンの管轄区域は、管理者の名前をつけて、泉川山、石原山などと一般に呼ばれていた。

1893年か94年ごろ、泉川寛（西原町字千原在住、昭和5年生）さんの曾祖父・泉川寛忠さんがヤマバーンとして、千原に入植した。その後、祖父の寛言さんの二代にわたって、ヤマバーンを勤めた。

曾祖父はブサー（武の心得のある者）で、盗伐の取り締まりのため、西原間切から派遣された。当時は、盗伐者には横暴な者もいて、それに対抗するためには、腕力のあるブサーでなければ勤まらなかった。

屋号は茶山泉川といって、家は現在の琉球大学構内の農学部と工学部の間にある北食堂辺りにあった。他にも、石原さんといって、ヤマバーンを勤めていた人がいた。

山の管理区域はそれぞれ決まっていた、茶山泉川はおよそ1万坪の山を管理していた。

ヤマバーンをする代わりに、居住地と耕作地を無償で与えられた。耕作地の総面積は2千坪ぐらいで、数カ所に分散していた。耕作地にはイモ、アワ、キビ、ソバ、サトウキビなどを植えていた。焼畑のように野焼きをして、作付けするときもあった。

2. 棚原山の生活風景

泉川寛さんの家の近くに、トーフクエーマーチと呼ばれる大きな松の木があった。大人二人で抱えられる大きさで、その木の根元には御香炉があって、拝み所になっていた。そこに豆腐を供えたら、いつの間にか無くなっていったので、トーフクエーマーチ（豆腐を食う松）の名がつくようになった。トーフクエーマーチの場所は、泉川家の屋敷の側と言う人もいるし、また、その泉川さんの家の南側の川に下りた谷底の辺りにあった、という人もいる。このトーフクエーマーチは昭和8年ごろまであったが、その後、理由はよく分からないが、よそ者によって切られて無くなったという。

シージマタの御嶽というのが、現在の琉球大学構内の球陽橋の下、東側寄りの谷底近辺にあった。

農学部建物の北側駐車場の近くに、ボージュシューヌカー（坊主御主の井戸）というのがある。第二尚氏の尚瀬王（1804～1834）が隠居して、何かの事情で首里から千原の棚原山に移り住んでいたころ、この井戸を使っていたという。この井戸の名前は、そのことに由来する。ボージュシューの住居は、今の北食堂の北西側隣にあったという。大学移転の際に整地工事で、この井戸は壊されようとしたが、そのとき首里のノロ（神職）から残すように言われ、現在コンクリートで囲まれて保存されている。

現在の琉球大学の宜野湾口から入った信号機の交差点の右側、農学部寄りの方に、昔、茶山ンマイーという馬場があった。そこで昔は馬競争をして楽しんだ。

今の琉球大学構内の体育館の辺りは、チャーヤマ（茶山）と呼ばれていた。昔、首里王府のクージ（公事）で、このチャーヤマにはお茶が栽培されていた。

今の琉球大学構内の千原池は、新たに堰き止めて造られたもので、以前は、川が流れていて、この川沿いに個人有の畑が広がっていた。その川にはウナギ、カニ、エビなどがいて、よく採ってきて料理して食べた。

農学部付属農場棟の西の小高い森は、イシグスクモーと呼ばれていて、戦時中はここに日本軍の210高地があった。この辺りは激戦地で、村有林内も焼け野が原になって、遺骨がゴロゴロしていたという。

周辺の人々は、ヤマバーンの目を盗んで、村有林内で山羊や牛馬の草を刈ったり、また薪などを採ったりした。ヤマバーンの人々は、マーチバーの葉（松の葉）、グシチ（ススキ）、木の下枝などを、無償で村有林内から採取し、ギンネム、サトウキビの搾り殻などと一緒に、サーター屋の燃料に使っていた。

木の実などは、山入りして自由に採って食べた。シイジャー（和名・イタジイ）の実は煮てから、割っ

て食べた。ヤマムム（ヤマモモ）の実は、漬物にしたり、また生でも食べた。漬物はタケノコと一緒に塩漬けにした。タケノコは紅色になって、色がとてもきれいだった。ヤマモモにはミジムムとイシムムがあって、ミジムムの方がおいしくて味もよかった。カシ（オキナワウラジログシ）の実は、クールマー（コマ）にして、よく遊んだ。シメジなどのキノコ類が、シイやマツの木の下などにあって、昔、オバーたちが採ってきて、料理してよく食べさせられた。その他、ハンキ（ノボタン）、ギーマ、テーニー（テンニンカ）、クワーギ（シマグワ）、アカギ、バンシルー（バンジロウ）、クービ（ツルグミ）、シークワサー（ヒラミレモン）などの実も、よく採って食べた。

クービの木の皮は煎じて飲んだ。利尿効果があったという。

クサンダキ（ホテイチク）は釣り竿や家の屋根萱葺きの材料に、ンジャダキ（ホウライチク）はミージョーキ、パーキ、カゴなどの竹細工用に、マータク（ダイサンチク）はタンクなどから水を引くときの水筒用に、それぞれ利用した。

IV 棚原集落のカヤモー

1. カヤモーの位置と利用

カヤモーとは、チガヤなどが生えている原野で茅葺き家の材料をとる茅場のことである。棚原集落の人々が利用していた主なカヤモーには、①サクダモー（佐久田毛）、②ウナガモー（翁長毛）、③ハブモー、④クウシチャモー（小橋川毛）などがあった。その他のカヤモーからも個人的に刈り取っていた。

ウナガモー（翁長毛）は、現在のキリスト教短期大学のある場所に、サクダモー（佐久田毛）は、今の琉球大学病院の南斜面辺りに、クウシチャモー（小橋川毛）は、字小橋川と字内間両字の北西側の斜面辺りに、ハブモーはクウシチャモーの隣りに、それぞれあった。

ハブモーとは、その地形がハブの形に似ていることからきているという。この地域一帯はウツウーというハルナー（原名）がついている。

字小橋川・字内間辺りのカヤモーは、個人有のカヤモーで、そこを棚原集落の人達は、現金で買って、自ら刈り取っていた。ここのカヤモーは、ニシバルグラー（西原小）の集落の人々も同じように利用していた。

各個人のカヤモーには、境界を示すために、ホーガー（和名・ミツバハマゴウ）という木が植えられていた。ホーガーの木は、分水嶺や谷底あたりによく見られた。買い取ったカヤモーは、区域を明確にするために、マカヤ（チガヤ）の葉っぱを所々に結んで目印にした。

カヤモーの刈り取りには、サーター組のメンバーや親戚の人達が、ユイで参加した。サーター組は、棚原集落内だけで10組ほどあった。

カヤモーで刈り取るのは、茅葺き屋根用のマカヤで、2尺束の千束ぐらいで、一軒の家ができた。

カヤモーの利用は、昭和30年代ごろまで続いていたが、家の構造がトタン屋根、瓦屋根、コンクリート造りへと変わっていくにつれて、次第になくなっていった。

2. カヤの種類とその利用

棚原集落の人々は、熟し過ぎたカヤのことをトゥマイガヤといった。トゥマイは「止まる」の意で、このことから「価値が下がる」、「値段が下がる」意味に解釈された。

カヤは2～3年の間に刈り取らないでいると、枯れ葉や腐った葉っぱなどが多くなり、使用価値が下がる。このトゥマイガヤで家を葺くと、長持ちしないという。

マカヤ（和名、チガヤ）の刈り取りには時期があった。秋に刈り取るマカヤは、葉っぱが熟していて、長持ちする。カヤモーは毎年刈り取らないと、そのままだと腐れてギンネムなどに負けてしまう。一年ごとに刈り取るカヤモーが、質的には一番よい。刈り取ってきたマカヤは、家の準備が整うまで、しば

らく庭などに積んで置いてから使った。

刈り取ったマカヤは、肩で担いで道路に出し、そこから馬で集落まで運んだ。

屋根葺き用には、マカヤとンマガヤ（和名、ヒメアブラススキ or オカルカヤ）を使った。屋根の下層部にンマガヤを敷き、その上にマカヤを載せた。最上部のマカヤをアングアヤといった。アングとは頭につける油のことである。

ンマガヤの花は赤紫色でバラバラに咲く。穂は長い。節があって横に伸びる。花穂を皮膚につけると、痒くなる。これをカヤマキーといった。湿気が多く、よく肥えた土地に生育する。

ウナガモーには、三分の二はマカヤ、その他は、ンマガヤが生えていた。サクダモーにはマカヤが多かった。ハブモーやクワシチャモーにはンマガヤが多く生えていた。

V 棚原集落の人々の森と暮らし

1. 村（町）有林との関わり

茅葺き家の構造材には、シィジャー（イタジイ）、ンジュ（イジュ）、屋根のキチ材にはアディク（アデク）や小丸太のチャーギ（イヌマキ）などを使った。用材は主に山原材を与那原辺りで調達した。

茅葺き屋根は、キチ材の上に、竹を編んで載せ、その上にカヤを積んで縛り付ける。竹材には、ンジャダキ、クサンダキなどを使った。クサンダキは他の所ではチンブクダキとか呼んでいる。ダキブチといって、ヤンバラダキの葉っぱで葺いた屋根は、カヤで葺いた屋根よりも長持ちした。

村有林内では、首里汀良町の人々が、地上に落ちたシママーチ（リュウキュウマツ）の葉っぱや枯れ枝などを、かき集めて採っていた。それをきれいにそろえて束ね、頭にのせて運んでいた。

サーターヤーでは、燃料として、ウージーガーラ（サトウキビの搾り殻）、ソウーティーチャー（ソテツ）の葉、グシチ（ススキ）、ソラマメのガーラ（茎）、シママーチ（リュウキュウマツ）の枝などが主に利用された。雨降りのときや、燃料が不足したときなどには、石炭なども利用された。

子供達は、畑の周辺の新原野や村有林内で、タカイチパー（ナワシロイチゴ）、クービ（ツルグミ）、モモギー（ヤマモモ）、バンシルー（バンジロウ）、テーニー（テンニンカ）、ギーマ（ギーマ）、チジワラーなどの実を、よく採って食べた。

ギンネムは方言でチャマーミーという。乾燥した茶色の実を針糸に通し首飾りにした。

現在の琉球大学のキャンパス内は、昔は西原町の公有林で、そこにはシママーチ（リュウキュウマツの人工林）が多く、モモギー（ヤマモモ）やクービギー（ツルグミ）などもよく見られた。これらの実もよく採って食べた。

2. 棚原集落の植物民俗誌

1) 食 用

棚原集落での今回の調査で確認できた主な野生食用植物の数は、全部で18種類である。植物の種類は、アカギ、オキナワシャリンバイ、フクマンギ、クチナシ、ギーマ、ツルグミ、シマグワ、ソテツ、モクタチバナ、テンニンカ、バンジロウ、シマヤマヒハツなどの木本類をはじめ、ホソバワダン、セリ、タチアワユキセンダングサ、ツワブキ、ノボタン、ホウロクイチゴなどの草本類が確認された。

これらのうち果実が生のまま食用となっていたのは、アカギ、オキナワシャリンバイ、フクマンギ、ギーマ、ツルグミ、シマグワ、モクタチバナ、ホウロクイチゴ、テンニンカ、ノボタン、バンジロウ、シマヤマヒハツなどである。

ツワブキは茎の皮をむき、またタチアワユキセンダングサの葉っぱなどは、茹でてアク抜きして食べたという。

セリの若葉やホソバワダンの葉っぱは、和え物にしたり、肉汁に入れて食べた。

ホテイチクの竹の子は焼いて食べたり、漬物にした。ソテツの実や幹からは澱粉がとれ、毒抜きして食用に供されている。ガジュマルやヤブニッケイの灰汁で、木灰そばを作った。これらの木の灰は白く、触るときめが細かいという。

赤飯を炊くとき、クチナシの実を入れて、炊いて食べた。

2) 薬 用

薬用植物として、アダン、シチトウイ、サツマイモ、アキノワスレグサ、ジュズダマ、ヨシススキ、オオバコ、セリ、サンゴジュ、サルカケミカン、ツルソバ、スベリヒユ、チガヤ、ホソバワダンなど、14種類が今回の調査で確認できた。

処方される病名は、肺炎、腫れ物、便秘、腹痛、止血、下痢止め、魚毒などである。

薬用としての植物利用で最も目立ったものは、肺炎のときに処方する植物である。肺炎の薬として利用される植物には、アダンの新芽、シチトウイの新芽、アキノワスレグサの新芽、セリ、ジュズダマの根っ子、ヨシススキの新芽、オオバコなどがある。処方するときは、これらの植物をまとめて、豚の肝臓と豚肉と一緒に煮こみ、その煎じ汁を飲む。

その他、腹痛のときはホソバワダンの葉っぱをつついて搾った青汁を飲む。腫れ物ができると、オオバコの葉っぱを火で炙って患部に貼って吸い出す。便秘にはスベリヒユを茹でて食べる。血止めには、チガヤの花穂の綿を切り傷の上に貼るとよい。サツマイモの葉も揉んで傷口につけると、血が止まる。豚がお腹をこわしたときには、ツルソバを煎じて、その汁を餌に混ぜて食べさせた。

植物によっては、魚毒として利用されているものもある。サンゴジュの葉や枝をつついて田んぼに入れると、魚が中毒して浮いてくる。それらを採って食用に供したという。

3) 用 材

燃料用薪から、建築用材、農具類、日常生活に欠かすことのできない生活用品など、その種類は実に多種多様にわたっている。

生活用材としての植物利用について、主なことを拾い上げてみると、以下の通りである。

ホテイチクの竿でヤーサシバーイを作った。ヤーサシバーイのヤーサは屋根（家）、シバーイは縛る意味である。ヤーサシバーイは棒の先に穴が開いていて、縄を先の穴に結び、茅葺き屋根を締めるときに、上下に突き刺す道具のことである。

ススキの中でも方言でアムトゥグシチというのがある。アムトゥとは畑の畦道のこと、グシチはススキのことで、畑の畦道に生えているススキという意味である。アムトゥグシチはススキの小さいもので、家畜小屋の屋根葺き用に使った。またグシチのバランで箒を作った。バランとはススキの花穂のことで、アムトゥグシチにはバランが少なかったという。

ダイサンチク（方言・マータク）は物干し竿のほかに、ナラシ用材としても利用された。ナラシとは、この竹の両端をヒモで結び、それを天井からぶら下げ、それに作業着などを掛けておくものことである。

ホウライチク（方言・ンジャダキ）などは、さまざまな生活用具に利用されている。裂いた茎は編カゴやフチブク（茅葺き屋根の締め）などに使われる。幹に粘りがあるので、次のような生活用具の材料に使った。

ナービヌフタ（カマンタともいう。鍋の蓋）。ミージョーキ。ユイ（豆類を選別）。ソーキ・パーキ（豆類や野菜入れ）。サギジョーキ（フタディールともいう。芋を入れ、木にぶら下げる）。マーグ（女性の下着入れ）。ミーバーラ（鳥籠）。ウーバーラ（芭蕉布の糸を紡いで入れる）。ティールグワー（豆入れ。畑で豆まきのときに腰にぶら下げて使う）。ミーユヤー（芋や餅を蒸すときに使う）。サギディール（食べ物の保管。木にぶら下げる）。

クロツグ（方言・マーニ）の葉は、味噌麴を作るとき、麴の上に被せてネズミ避けに使った。

4) 緑肥

畑や田んぼの緑肥としてよく利用されていたのがクロヨナ（方言・ウカファ）、アカギ、ツワブキの葉っぱである。このクロヨナの葉が緑肥効果にはよかったという。

5) 飼料

山羊や牛馬の餌のほとんどは、植物性飼料によってまかなわれていた。飼料用植物としては8種類が確認できた。その植物名はハマイヌビワ、カラムシ、ススキ、セリ、ハルノノゲシ、ホソバムクイヌビワ、トベラ、チガヤなどである。

ススキでもとくにアムトウグシチの方が牛馬の飼料によかったという。ハルノノゲシ（方言・タカンジャー）はウサギが好んでよく食べた。

6) 染料

染料用植物としてはシャリンバイの皮（茶色、芭蕉布を染める）、クチナシの実（黄色染料）、フクギの皮（黄色染料）などが利用されていた。

7) 行事

棚原集落では神行事をはじめ各種行事で様々な植物が使われている。今回の調査で確認できた樹種は8種類で、その樹種名はピロウ、ススキ、シマグワ、メドハギ、イヌマキ、マサキ、ヒメユズリハ、ハマサルトリイバラなどである。

旧12月8日、棚原集落ではオニモチ・カムーチー（男のムーチー）のとき、ピロウ（方言・クバ）の木の新芽の葉を使って、ムーチー（餅）を作った。

旧5月5日の子供の日には、ハマサルトリイバラの葉の上に餅をのせたものを作った。

旧8月10日のシバサシの行事では、シマグワ（方言・クワーギ）の木とススキ（方言・グシチ）を束ね、魔除けのため屋敷の四隅、門の両方、火の神、仏壇などに立てた。

メドハギ（方言・ソーローメーシー、ソーローファージー）は仏のお箸として仏壇に供えた。迎え盆のとき、この植物の枝葉を数本（4~5本）束ねて、水を入れたお椀とともに、家の入り口に置く。先祖がこれで足を洗う。

イヌマキ（方言・チャーギ）の葉っぱを仏壇に生ける。

マサキ（方言・フチマンギー）は仏壇に生ける。

ヒメユズリハ（方言・ユジリバー）は、旧12月24日のウガンプトウチのとき、ホテイチク（方言・クサンダキ）と一緒に束ねて使う。ウガンプトウチは1年間の無事に感謝する神行事で、「上のウタキ」で行う。このユジリバーの枝葉をとるときには、線香をたいて神に拝んでから採った。このユジリバーの枝葉は、また那覇の町に持って行って売ることもあった。

8) 遊び道具

子供達は様々な形で植物を遊びの中に取り入れている。

ゴモジュやサンゴジュの実を、ダイサンチクやホウライチクの幹で作った筒の中に入れ、中の穴に竹の枝で作った心棒を通し、豆鉄砲にして遊んだ。コバンモチやクロツグは木剣代わりになる。フクギ葉は左右対称になっていることを生かして、葉草履にして遊ぶ。女の子達は、黒く細長いナカハラクロキの種子に糸を通して首飾りにする。オジギソウには手で触りながら、早く寝なさいよ、と言って子供達は遊んでいたという。

9) その他

タブノキ（方言・ウーシバキ）の葉っぱをイシドーニ（石臼）に入れ、つついてドロドロにする。これを土とこねると粘っこくなる。これを接着剤代用として、石組みなどに使った。古い墓の石と石の間にも、赤土とこねて使われた。昔のサーターヤー（黒糖製造小屋）では、キビの圧搾機械の回転に、馬力を利用した。馬を走らせる回転道の足場を固めるのにもこれを使った。

ガジマルにはタツマルとホーヤーガジマルの二種類の方言名がある。

タツマルは上に伸びる。ヒゲはない。ホーヤーガジマルのホーヤーは横に這うことの意味である。ホーヤーガジマルはヒゲが多く、横に広がっていく。

サツマイモの葉っぱは水澄ましに使った。カンダバーカズラをちぎって水溜りに入れると、上に浮いたゴミなどがサーッと散って、水がきれいになる。その水を飲んだ。

ゲッキツ（方言・ギキジャー）は屋敷の生垣に使う。

ススキ（方言・グシチ）でグシジャン（普通サンと呼ばれる）を作った。グシはススキ、ジャンはサンに通じ、ススキのサンを意味する。グシジャンはある所有物の表示に使われるもので、ススキの葉先を結ぶと、人の形に似ることからそれを差し立てて、所有主を表す意味に使われる。

モモタマナ（方言・クワディーサー）は人の泣き声を聞いて大きくなる、と言われている。屋敷内に植えることを嫌う。

ヤブニッケイ（方言・シバキ）の幹をピロウ（方言・クバ）の葉っぱで縛って垂らし、ティーシーガーミ（水ガメ）に天水を溜めた。お茶にはこの水がいい。葉っぱの格好が上を向いていて、水を溜めやすい。

ホルトノキ（方言・ターラシ）の幹にクバの葉っぱを巻いて雨水を溜め、生活用水に使った。

オオバギは方言でチビカタマヤーギーという。チビはお尻のこと。カタマヤーは詰まる意。ギーは木のこと。総じて「お尻が詰まる木」の意味になる。この木の葉っぱにはクビれた切れ目がない。お尻拭きに使うときは、わざと破って切れ目を入れてから使った。そうしないとお尻が詰まる。

ヒマ（方言・チャンダカシー）の実でローソクを作った。

ハイキビ（方言・テンプグサ）の葉っぱのクビレの数で台風襲来の数を予測した。

3. 棚原集落でのソテツ利用

ソテツの幹は大きなものではなく、根っ子の方から分岐して出てくる小さなソテツの子供を食用にした。半分ぐらい土に埋もれているもので、それを方言でスウーティチャーヌクワと言った。スウーティチャーはソテツ、クワは子供の意味である。

子供達は大きなソテツの幹は輪切りにして、芯を抜き、心棒を通しその上にソーメンの空箱を載せて、車代用にして遊んだ。

スウーティチャーヌクワを取ってきて、幹を削り、中身を利用する。削り殻は堆肥として畑に撒いた。外皮を削り取った中身は、先ずムクジシリー（芋削り器）で摺る。ザルに風呂敷を敷き、それを桶樽の上にのせる。その風呂敷の上に、摺ったものを載せ、それに水をかけ、手で揉んで、デンプンを桶樽に溜める。通常、この作業は、水をかける人と手で揉む人、2人がかりで行う。桶樽に溜ったデンプンは一昼夜放置して、デンプンと水を分離させ、その水は捨てる。このデンプンを4～5日ぐらい、天日に干した後、それを利用する。

デンプンを取った後に残るカスも、4～5日天日に干して、それを臼で粉にし利用した。カスから取ったデンプン粉に野菜などを入れ、ジュシーメーにして食べた。カスのデンプン粉ではまた、ナントウも作った。カスのデンプン粉に、サーターユ（黒糖製造ナベを洗った汁）やサトウキビの絞り汁を入れ、そのツナギとして、水晒しで沈澱させて作ったデンプンを混ぜ合わせ、それをゲッターの葉に載せて蒸す。ソテツの大きな幹にはデンプンが少なく、根部の所の生まれたてのソテツの子供には、デンプンが多く含まれている、という。ソテツの子供のデンプンについては、毒抜きはそれほど気にしなくていい、という。

ソテツの子供から作ったスウーティチャーグー（ソテツの粉）を選んで残ったものをユイヌイーという。これを味噌や油味噌にしたり、またネギなどを入れてオカズにして食べた。このユイヌイーは乾燥しているので、料理に使うときは、水分を含ませてから使った。

次にソテツの実の利用については、あく抜きの仕方が幹と比べて多少違う。

ソテツの幹に比べて、その実には毒が多く、毒抜きが必要である。ソテツの実で中毒する人が多かった。実から澱粉をとる場合には、以下のような方法で行っている。

実を殻ごと二つに割る。殻のついたまま4～5日、天日に干す。殻と果肉が分離すると、その果肉を取って、2週間ぐらい天日で乾燥させる。その乾燥した果肉を1日水につける。その果肉をバショウ葉に包んで、2～3日フラス(発酵)させる。それを水洗いして、4～5日、日干しする。こうして出来上がった果肉を、つき臼でつついて粉にする。これが粗挽き粉である。さらに細かくするためには、日干したものを挽き臼でひく。

これらの粉でターチジュシー、テンプラ、ナントゥ、味噌などを作った。ターチジュシーには粗挽きの粉の方が味が良かったという。テンプラやナントゥには挽き臼で挽いた細かい粉を使った。テンプラにはニラやヨモギなどを入れた。テンプラはサンガチグワーシー(三月菓子)といって、三月の桃の節句によく作った。女の子が生まれると、子供の健やかな成長を願って、このサンガチグワーシーを必ず作り、親戚などに配った。ソテツの赤実の方が、幹より美味しかったという。

ソテツは畑のアブシ(畦)や個人の山などに栽培されていたという。

その他にも、ソテツは以下のような利用の仕方がなされている。

ソテツの葉っぱは、黒糖製造の燃料用としても利用されていた。またソテツ葉は、5枚ほど重ねて箒にしたり、葉を編んでセミカゴに使っていた。子供達はこのセミカゴにセミを集め、卵を沢山産ますためだといって、それをニワトリにエサとして与えていた。ソテツ葉は運動会のときのアーチ門や旧7月の盆踊りの舞台の飾りなどにも使ったという。

VI 棚原集落の植物の方言名(和名)とその利用リスト

アカギー(アカギ、トウダイグサ科)：葉っぱは緑肥。幹は小屋の柱材。豚のトーニ(餌皿)用材。実を食べた。ナシの味がする。

アカズミーギー(オキナワシャリンバイ、バラ科)：皮から染料をとり、芭蕉布を染めた。実を食べた。

アダニ(アダン、タコノキ科)：シラグチ(新芽)は肺炎の薬用。

アチネーク(ハマイヌビワ、クワ科)：

アンマーチーチー(イヌビワ、クワ科)：アンマーは母、チーチーはお乳のこと。この木を傷つけると、白汁が出る。方言名は、この白汁に由来。山羊の草。

イー(シチトウイ、カヤツリグサ科)：シラグチ(新芽)の柔らかい部分は肺炎の薬用。

イチユビ(フクマンギ、ムラサキ科)：実を食べた。

ウーシバキ(タブノキ、クスノキ科)：イシドーニ(石臼)に葉っぱを入れ、つついてドロドロにする。これを土とこねると粘っこくなる。これを接着剤代用として、石組みなどに使った。古い墓の石と石の間にも、赤土とこねて使われた。昔のサーターヤー(黒糖製造小屋)では、キビの圧搾機械の回転に、馬力を利用した。馬を走らせる回転道の足場を固めるのにもこれを使った。

ウーベヌファー(カラムシ、イラクサ科)：山羊の草。

ウカファ(クロヨナ、マメ科)：葉っぱを田んぼの肥やしにした。

エーグワーギー(イスノキ、マンサク科)：

カイグングサ(?)：戦後、葉っぱを茹でて食べた。

カジマヤーギー(クチナシ、アカネ科)：この木の花の形がカジマヤー(風車)に似ていることに由来。赤飯を炊くときに、この木の実を入れた。実からは黄色の染料がとれる。

ガジマル(ガジュマル、クワ科)：薪。この木の灰汁でソバを作った。タツマルとホーヤーガジマルの二種類がある。タツマルは上に伸びる。ヒゲはない。ホーヤーガジマルのホーヤーは横に這うことの意味。ホーヤーガジマルはヒゲが多く、横に広がっていく。

- カラダキ（マダケ、イネ科）：稈は洗濯物の干し竿用。
- カンダパー（サツマイモ、ヒルガオ科）：葉を揉んで傷口につけると、血が止まる。水澄ましに葉っぱを使った。カンダパーカズラをちぎって水溜りに入れると、上に浮いたゴミなどがサーッと散って、水がきれいになる。その水を飲んだ。
- ギーマ（ギーマ、ツツジ科）：実を食べた。花がスズランの花のようで庭木によい。
- ギキジャー（ゲッキツ、ミカン科）：屋敷の生垣に使う。
- クービ（ツルグミ、グミ科）：実を食べた。材はハンマーの柄に使った。
- クサンダキ（ホテイチク、イネ科）：他所ではチンプクダキと呼ぶ。これのタケノコを焼いて食べたり、漬物にした。稈でヤーサシパーイを作った。ヤーサシパーイのヤーサは屋根（家）、シパーイは縛る意味か。ヤーサシパーイは、棒の先に穴が開いていて、縄を先の穴に結び、茅葺き屋根を締めるときに、上下に突き刺す道具。稈を火にあぶって作る。滑りをよくするために油を塗る。屋根用材。
- グシチ（ススキ、イネ科）：アムトゥグシチ。アムトゥとは畑の畦道のこと。畑の畦道に生えているススキという意味。アムトゥグシチはススキの小さいもの。家畜小屋の屋根葺き用に使った。グシチのバラで箒を作った。バラとはススキの花穂。アムトゥグシチはバラが少ない。アムトゥグシチは牛馬の飼料によい。グシジャン（普通サンと呼ばれる）を作った。グシはススキ、ジャンはサンに通じ、ススキのサンを意味する。グシジャンはある所有物の表示に使われるもので、ススキの葉先を結ぶと、人の形に似ることからそれを差し立てて、所有主を表す意味に使われる。
- クバ（ビロウ、ヤシ科）：旧12月8日、オニモチ・カムーチー（男のムーチー）のとき、この木の新芽の葉を使って、ムーチー（餅）を作った。葉は団扇やツルベ（水汲み用）などにも利用。
- グムルンギー（ゴモジュ、スイカズラ科）：材はハンマーの柄や、豆叩きのときに使うクルマポー（車棒）の柄に利用。実はハンタマイリー（豆鉄砲の弾）。
- クルチ（リュウキュウコクタン、カキノキ科）：材は琉球三線の棹に使う。
- クルボーギー（ナカハラクロキ、ハイノキ科）：材は建築用材。種子は黒く細長い。女の子達が、この種子を糸に通して首飾りにしていた。
- クワーギ（シマグワ、クワ科）：実は食用。旧8月10日のシバサシの行事で、この木とススキを束ね、魔除けのため屋敷の四隅、門の両方、火の神、仏壇などに立てた。
- クワディーサー（モモタマナ、シクンシ科）：人の泣き声を聞いて大きく鳴る、と言われている。屋敷内に植えることを嫌う。
- クワンソー（アキノワスレグサ、ユリ科）：シナカンゾーとヤブカンゾーも方言名は同じ。シラグチ（新芽）は肺炎の薬用。肺炎のとき、ジュズダマの根っ子の白い部分、アダンのシラグチ（新芽）、シチトウイの新芽、ヨシススキの新芽、アキノワスレグサの新芽、オオバコ、セリなどに、豚の肝臓と豚肉を入れて煮込み、その煎じ汁を飲む。
- クワントウウイ（スイカ、ウリ科）：
- コーガミー（オジギソウ、マメ科）：子供達が手で触りながら、早く寝なさいよ、と言って遊んでいた。
- サーターギ（ネズミモチ、モクセイ科）：
- ササガー、ササギー（サンゴジュ、スイカズラ科）：魚毒。葉や枝をつついて田んぼに入れると、魚が浮いてきた。実はハンタマイリー（豆鉄砲の弾）に使った。
- サシグサ（タチアワユキセンダングサ、キク科）：葉っぱを茹でて食べた。
- サラカチ（サルカケミカン、ミカン科）：薬木。
- サンシンギー（リュウキュウコクタン、カキノキ科）：サンシンは三味線のことで、この木で三味線の棹を作ることに由来。
- シーボージャー（ツルソバ、タデ科）：豚がお腹をこわしたときに、この草の煎じ汁を餌に混ぜて食べ

させた。

シーリバー (セリ、セリ科) : 若葉はおひたしにしたり、肉汁に入れて食べた。家畜の餌にもなる。肺炎の薬用。

シシダマ (ジュズダマ、イネ科) : 根っ子の白い部分は肺炎のときの薬用。

シバキ (ヤブニッケイ、クスノキ科) : 幹をクバ (ビロウ) の葉っぱで縛って垂らし、ティーシーガーマ (水ガメ) に天水を溜めた。お茶にはこの水がいい。葉っぱの格好が上を向いていて、水を溜めやすい。薪。この木の灰汁でソバを作った。この木の灰は白い。いい灰は白く、触るときめが細かい。

シラチグ (コバンモチ、ホルトノキ科) : この木で木剣を作った。荷物を運ぶ棒に使った。

スーティチャー (ソテツ、ソテツ科) : 葉は薪として黒糖造りに利用。実や幹から澱粉を採って毒抜きして食べた。

スプサーギー (モクタチバナ、ヤブコウジ科) : 子供のとき、実をよく採って食べた。

ソーローメーシー、ソーローファージー (メドハギ、マメ科) : ソーローは祖霊、メーシーはお箸のこと。仏のお箸として仏壇に供えた。迎え盆のとき、枝葉を数本 (4~5本) 束ねて、水を入れたお椀とともに、家の入り口に置く。先祖がこれで足を洗う。

ターラシ (ホルトノキ、ホルトノキ科) : この木にはセミがよくつく。クバの葉っぱを幹に巻いて、雨水をとった。

タカイチュバー (ホウロクイチゴ、バラ科) : 実は美味。

タカンジャンナー (ハルノノゲシ、キク科) : ウサギの好物。

タマグワーギー (オオシマコバンノキ、トウダイグサ科) :

チギ (オキナワツゲ、ツゲ科) : この木で印鑑を作った。

チビカタマヤーギー (オオバギ、トウダイグサ科) : チビはお尻のこと。カタマヤーは詰まる意。ギーは木のこと。総じて「お尻が詰まる木」の意味。この木の葉っぱにはクビれた切れ目がない。お尻拭きに使うときは、わざと破って切れ目を入れてから使った。そうしないとお尻が詰まる。

チブルヤマーギー (?) : チブルは頭のこと。畑の緑肥。

チミクヤーギー (ホソバムクイヌビワ、クワ科) : チミは爪、クヤーは食うの方言で、「爪を食う木」の意味になる。葉を牛や山羊がよく食べる。

チャーギ (イヌマキ、マキ科) : 床柱用材。葉っぱを仏壇に生ける。

チャンダカシー (ヒマ、トウダイグサ科) : 実でローソクを作った。

ティカチャー (オキナワシャリンバイ、バラ科) :

テーニイ (テンニンカ、フトモモ科) : 実がとってもおいしい。きれいな花が咲く。

テーバーラ (ツブキ、キク科) : 茎の皮をむき、茹でて食べた。山羊に踏まして肥やしにした。

テングサ (ハイキビ、イネ科) : テングはお臍のこと。葉っぱのクビレの数で台風襲来の数を予測。他の所では、ナージチューという。

トウジンギー (カミガヤツリ、カヤツリグサ科) : 茎はローソクの芯代用。

トゥピラギー (トベラ、トベラ科) :

トゥピランギー (トベラ、トベラ科) : 山羊のお産のとき、安産のために食べさせた。

トーグシチ (ヨシススキ、イネ科) : シラグチ (新芽) の部分は肺炎の薬用。

トーフアナビー (ホウズキ、ナス科) :

ドクギー (ナガミボチョウジ、アカネ科) : 昔から毒の木として恐れられていた。

ニンプトッカー (スベリヒユ、スベリヒユ科) : 茹でておひたしにして食べた。便秘に効く。

ハーメーケーギー (イタチガヤ、イネ科) : ハーメーはおバアさん、ケーは陰毛のこと。総じて「オバアさんの陰毛の木」の意。

ハーメーフージョー (?) : ハーメーはおバアさん、フージョーはタバコのキセルのこと。

- ハンクウ（ノボタン、ノボタン科）：実は食べられるが、テーニイよりあまり美味しくない。食べると、口や歯が真っ黒くなる。
- バンシルー（バンジロウ、フトモモ科）：実を食べた。在来種の方が味がある。
- ヒラジカギー（クスノハガシワ、トウダイグサ科）：ヒラは農機具のヘラのこと。この木の幹の二又の部分でヘラの柄を作った。
- ヒラファグサ（オオバコ、オオバコ科）：腫れ物に葉っぱを揉んでつけた。葉を火に炙り腫れ物に貼って吸い出す。肺炎の薬用。
- ピンギ（クワノハエノキ、ニレ科）：俎板の用材に最高。
- フクジ（フクギ、オトギリソウ科）：家畜小屋の桁材。皮は染料（黄色）。葉は子供達が葉草履にして遊んでいた。
- フチマンギー（マサキ、ニシキギ科）：仏壇に生ける。
- マータク（ダイサンチク、イネ科）：物干し竿。ナラシ用材。ナラシとは、この竹の両端をヒモで結び、それを天井からぶら下げ、それに作業着などを掛けておくもの。子供達の竹鉄砲の材料。
- マーニ（クロツグ、ヤシ科）：味噌麴を作るとき、ネズミ除けのため、麴の上にこの葉を被せた。毛は束ねてタワシ代用。茎は子供達の遊び道具（木刀）。
- マイカタマヤーギー（オオバギ、トウダイグサ科）：マイはお尻のこと。使用の仕方はチビカタマヤーギーに同じ。
- マカヤ（チガヤ、イネ科）：花穂の綿を切り傷の上にくっつけると、血が止まる。家畜の餌。
- マミク（クスノハカエデ、カエデ科）：屋敷に生えていた。
- ムーサーヌファ（オオバコ、オオバコ科）：
- ヤナブ（テリハボク、オトギリソウ科）：
- ヤマクンブー（シマヤマヒハツ、トウダイグサ科）：実を食べた。
- ヤマザクラ（リュウキュウクロウメモドキ、クロウメモドキ科）：
- ヤマサンチナ（ハマスルトリイバラ、ユリ科）：旧5月5日の子供の日には、この葉の上に餅をのせたものを作った。葉を那覇の町に持って行って売った。
- ヤンバラダキ（リュウキュウチク、イネ科）：程で茅葺き家の壁を編んだ。萱葺き家の壁のことをチヌブという。チヌブにはススキも使う。これをチヌブグシチと言った。
- ユーナ（オオハマボウ、アオイ科）：葉っぱはトイレットペーパーの代用。食べ物のをせる葉皿としても使用。豚小屋の近くに植えて利用した。
- ユジリバー（ヒメユズリハ、トウダイグサ科）：旧12月24日のウガンブトウチのとき、ユジリバーとクサンダキを一緒に束ねて使う。ウガンブトウチは1年間の無事に感謝する神行事で、「上のウタキ」で行う。このユジリバーの枝葉をとるときには、線香をたいて神に拝んでから採った。このユジリバーの枝葉は、また那覇の町に持って行って売ることもあった。
- ンジンチャー（シマアザミ、キク科）：ンジは刺のこと。
- ンジャダキ（ホウライチク、イネ科）：裂いた程（茎）は編カゴやフチブク（茅葺き屋根の締め）に使用した。程にねばりがあるので、次のような生活用具の材料に使った。ナービヌフタ（カマンタ。鍋のフタ）。ミージョーキ。ユイ（豆類を選別）。ソーキ・バーキ（豆類や野菜入れ）。サギジョーキ（フタディールともいう。芋を入れて、木にぶら下げる。）マーグ（女性の下着入れ）。ミーパーラ（鳥籠）。ウーパーラ（芭蕉布の糸を紡いで入れる）。ティールグワー（豆入れ。畑で豆まきのときに腰にぶら下げて使う）。ミーユヤー（芋や餅を蒸すときに使う）。サギディール（食べ物の保管。木にぶら下げる。）
- ンジャナ（ホソバワダン、キク科）：葉っぱを和え物にしたり、肉汁に入れて食べた。腹痛のとき、葉っぱをつついて搾った青汁を飲む。

ンジュ (イジュ、ツバキ科) :

ンバシー (クワズイモ、サトイモ科) : 葉で味噌を包んだ。葉を味噌屋に売りに行った。

表1 植物の和名・方言名対照表 (棚原集落)

和 名	方 言 名	科 名
アカギ	アカギー	トウダイグサ
アキノワスレグサ	クワンソー	ユリ
アダン	アダニ	タコノキ
イジュ	ンジュ	ツバキ
イスノキ	エーグワーギー	マンサク
イヌビワ	アンマーチーチー	クワ
イヌマキ	チャーギ	マキ
オオシマコバンノキ	タマグワーギー	トウダイグサ
オオバギ	チビカタマヤーギー、マイカタマヤーギー	トウダイグサ
オオバコ	ヒラファグサ、ムーセーヌファ	オオバコ
オオハマボウ	ユーナ	アオイ
オキナワシャリンバイ	アカズミーギー、ティカチャー	バラ
オキナワツゲ	チギ	ツゲ
オジギソウ	コーガーミー	マメ
ガジュマル	ガジマル	クワ
カミガヤツリ	トウジンギー	カヤツリグサ
ギーマ	ギーマ	ツツジ
クスノハカエデ	マミク	カエデ
クスノハガシワ	ヒラジカギー	トウダイグサ
クチナシ	カジマヤーギー	アカネ
クロツグ	マーニ	ヤシ
クロヨナ	ウカファ	マメ
クワズイモ	ンバシー	サトイモ
クワノハエノキ	ピンギ	ニレ
ゲッキツ	ギキジャー	ミカン
コバンモチ	シラチグ	ホルトノキ
ゴモジュ	グムルンギー	スイカズラ
サツマイモ	カンダバー	ヒルガオ
サルカケミカン	サラカチ	ミカン
サンゴジュ	ササガー、ササギー	スイカズラ
シチトウイ	イー	カヤツリグサ
シマアザミ	ンジシチャー	キク
シماغワ	クワーギ	クワ
シマヤマヒハツ	ヤマクンブー	トウダイグサ
ジュズダマ	シシダマ	イネ
スイカ	クワントウーウイ	ウリ
ススキ	グシチ	イネ

和名	方言名	科名
スベリヒユ	ニンブトゥカー	スベリヒユ
セリ	シーリバー	セリ
ソテツ	スウーティチャー	ソテツ
ダイサンチク	マータク	イネ
タチアワユキセンダングサ	サシグサ	キク
タブノキ	ウーシバキ	クスノキ
チガヤ	マカヤ	イネ
ツルグミ	クービ	グミ
ツルソバ	シーボージャー	タデ
ツワブキ	テーバーラ	キク
テリハボク	ヤナブ	オトギリソウ
テンニンカ	テーニイ	フトモモ
トベラ	トゥピランギー	トベラ
ナガミボチョウジ	ドクギー	アカネ
ナカラハクロキ	クルボーギー	ハイノキ
ネズミモチ	サーターギー	モクセイ
ノカラムシ	ウーベヌファー	イラクサ
ノボタン	ハンクウ	ノボタン
ハイキビ	テンググサ	イネ
ハマイヌビワ	アチネーク	クワ
ハマサルトリイバラ	ヤマサンチナ	ユリ
ハルノノゲシ	タカンジャナー	キク
バンジロウ	バンシルー	フトモモ
ヒマ	チャンダカシー	トウダイグサ
ヒメユズリハ	ユジリバー	トウダイグサ
ピロウ	クバ	ヤシ
フクギ	フクジ	オトギリソウ
フクマンギ	イチュビ	ムラサキ
ハウズキ	トーファナビー	ナス
ハウライチク	ンジャダキ	イネ
ハウロクイチゴ	タカイチュバー	バラ
ホソバムクイヌビワ	チミクヤーギー	クワ
ホソバワダン	ンジャナ	キク
ホテイチク	クサンダキ	イネ
ホルトノキ	ターラシ	ホルトノキ
マサキ	フチマンギー	ニシキギ
マダケ	カラダキ	イネ
メドハギ	ソーローファージー、ソーローメーシー	マメ
モクタチバナ	スブサーギー	ヤブコウジ
モモタマナ	クワディーサー	シクンシ
ヤブニッケイ	シバキ	クスノキ
ヨシススキ	トーグシチ	イネ
リュウキュウクロウメモドキ	ヤマザクラ	クロウメモドキ
リュウキュウコクタン	クルチ、サンシンギー	カキノキ
リュウキュウチク	ヤンバラーダキ	イネ

むすび

現在の琉球大学千原キャンパスは、近世期の琉球王朝時代には棚原山林・棚原山地と呼ばれ、首里王府の御用木を供給する杣山であった。またこのキャンパス内には王府直轄の茶園があって、和漢の茶葉が製造されて国用に供されていた。茶樹と一緒に、船の帆柱用材の杉（コウヨウザン）や建築用材の檜（イヌマキ）なども植えられていた。

この杣山は明治30年代の土地整理と杣山処分、その後の町村制施行の過程を辿って、その多くは当時の西原村の村有林に所有名義が変わった。

西原村への所有移転後も、村有林は王朝時代からのヤマバーン（山番）制度によって管理されていた。ヤマバーンの仕事は、主に盗伐の取り締まりであった。

村有林内の植林木の多くは、リュウキュウマツであった。

地域住民は王朝時代からの入会林野利用の慣行で、村有林内に自由に入りこみ、禁止木以外の枯れ木（薪用）の採取や牛馬や山羊の草刈りなどを行っていた。

キャンパス南側に位置する棚原集落での聞き取り調査によると、植物の利用は、食用、薬用、用材、緑肥、家畜の飼料、染料、神行事、遊び道具など、多種多様にわたっている。

村有林の周辺の前野などは、カヤモー（茅毛）として、各集落によって利用されていた。カヤモーから刈取られたカヤ（チガヤ）は、萱葺き屋根用の材料に使われた。

千原のキャンパス内には、ヤマバーンをはじめ寄留民などが住んでいた痕跡（井戸、墓地など）が見える。農学部近くのシージマタの御嶽などは、今でも棚原集落の人々が年に二回ほど拝んでいる。

王朝時代の杣山から西原町の公有林へ変わる過程で、地域住民によって現在の千原キャンパスでは、様々な人々の暮らしが森の中に刻みこまれてきた。この人々の山の歴史が息づくキャンパスを再認識し、それを今後のキャンパスライフに生かすことも、琉球における最高学府で学ぶ、われわれ一人ひとりの責務でもある。

謝 辞

本論文は主に聞き取り調査のデータ（1994～2001年）で取りまとめられている。以下、聞き取り調査でお世話になった方々を列記し、感謝申し上げたい。

泉川寛さん（昭和5年生、西原町字千原）。渡名喜庸得さん（大正11年生、同字千原）。伊波精吉さん（大正11年生、同字棚原）。伊波善英さん（大正6年生、同字棚原）。比嘉茂子さん（大正10年生、同字棚原）。伊波ウトさん（明治43年生、同字棚原）。

引用文献

1. 仲間勇栄 1984 沖縄林野制度利用史研究 31～44頁 130～147頁 沖縄 ひるぎ社。
2. 西原町史編纂委員会 昭和59年 西原町史 第二巻資料編一 141～142頁 沖縄 西原町役場。
3. 仲吉朝助 1952 杣山制度論 2～3頁 沖縄。